

新入医学生のために推薦したい図書

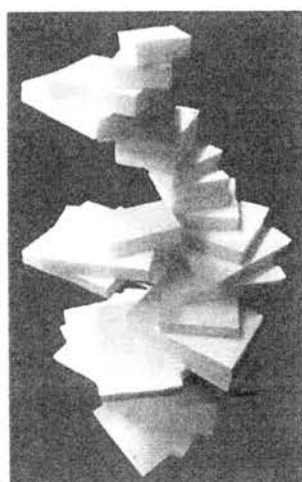
竹田 亮祐

山本 博

谷内江昭宏

金子 周一

平成25年6月



"Gene of Library"

(制作：金沢大学資料館 笠原健司)

あとがき

この小冊子は、平成 25 年度金沢大学医学類「特別講義（1 年生対象）」における講師—学生間の対話が契機となって編まれたものです。

金沢大学は総合大学であり、附属図書館の「読書案内」や「わたしの薦める一冊」シリーズには人文社会分野や医学以外の自然科学分野からの興味深く含蓄に富む推薦やヴィクトール・E・フランクフル「夜と霧」など医学生必読書の案内も含まれていることを申し添えます。

この小冊子が、皆さんのこれからの人生航路を照らす灯の発見につながれば幸いです。

山本 博 記

竹田亮祐 (昭和 27 年卒業)

Reading makes a full man. (Francis Bacon, 1561-1626)

読書は充実した人間をつくる。



医学生は、将来基礎一、臨床医学いずれの分野を専攻するにせよ、できるだけ多くの本を読むにこしたことはありません。読書が人間の思索、ものの考え方、日常の在りよう、未来への志向など、人間形成に大きな影響を与えるからにほかなりません。医学は medical science といわれるように理系の学問分野とされ、文系の知識は不必要のごとく理解されがちです。しかしながら医学・医療が生命、人間を対象にサイエンスのもたらした知と技を応用し、生命の謎を究め人びとの健康、ひいては幸福な社会の福祉繁栄を目指すかぎり、わたしたちは広い視野で、講義や医学書からのみでは得ることのできない人間学ともいべき something を身につけるため自発的な読書を習慣づけることが大切です。

20 世紀内科学の泰斗と讃えられる Harrison 教授は、『医学のルーツと実』のなかで「父を手本にして、私は毎夜最後の 30 分を科学あるいは、医学を以ってしてもなしえない、何か価値のあるものを読むことにあてました。歴史、文学（特に詩や劇作）、経済学、最近の世情等、また私が親しんでいる哲学の生かじりから得られる喜びは、非常に得るところがありました・・・一方私は、信じています。私が歩んだような医師、または教師としての成功は、そうした教養学科（人文科学）への私の関心から大きく導かれたものであります」と述べています。「医学のルーツと実」Harrison, T. 竹田亮祐訳、日本医事新報 2868,1979

ナウイ（流行）好みの若者にとって歴史や哲学は馴染みにくいかもしれませんが Study the past, if you would divine the future. といわれるように、わたしたちは先人の跡を振り返り人間の築いてきた文明、知の集積を知り、将来に向かって謙虚な気持ちで歩むべきであります。

医学生にとって手ごろな歴史書は、小川鼎三先生の「医学の歴史」¹⁾でしょう。金沢在住の作家の近著「吉田長淑」一わが国初の洋方内科医²⁾一も寸暇に読むに相応しい本です。医師の在り方を問いたい人にはよく Hufeland, CW「医戒」や Osler, W の「Aquanimitas: 平静の心」が薦められますが、むしろ Deekens, A 先生の死生学に関する著作なら読むに苦労は少なく、森岡恭彦先生の「医の倫理と法」³⁾ も分り易いでしょう。医師の生きようについては、Carossa, H の作品⁴⁾、終生、医学、また

文学にすぎまじい努力を傾注した鉄人、森鷗外の「高瀬舟」はじめ多くの著作⁵⁾、そしてこの人にしてこのような秘話ありを思わせる「鷗外の恋人」⁶⁾も興をそそる読みものでしょう。

今日のような World wide web の世界では、わたしたちの生は時代の波に翻弄されそうですが、日本人のこのころのハイマートは明治期にあるように思われます。その意味で「銀の匙」⁶⁾や「忘れられた日本人」⁷⁾、「寺田寅彦随筆集」⁸⁾は余暇に楽しめる文庫です。また現代社会をどのように捉えるかに興味を持つ方には「私にとっての 20 世紀」⁹⁾、「われわれはどんな時代を生きているか」¹⁰⁾の一読を薦めたいと思います。

心美しい女性向きの本として「置かれた場所で咲きなさい」^{A)}、謙虚なノーベル賞受賞者、下村修先生の「クラゲに学ぶ」^{B)}を、本学出身のお二人の著作として、吉村裕之先生の「病原体を追った人びと」一その栄光と残照一と三船順一郎先生の近著「遙かなる遣唐使の道」をあげておきます。

- 1) 小川鼎三:「医学の歴史」中公新書【原書】Lyons, AS & Petrucelli, RJ: Medicine An Illustrated History, Abradale Abrams
- 2) 小林弘子:「吉田長淑 わが国初の洋方内科医」橋本確文堂
- 3) 森岡恭彦:「医の倫理と法」南江堂
森岡先生（元東大外科教授）は、昭和天皇の手術をなされた外科医でエッセイ『手術室から「セラ・ラ・ヴィ」』講談社を上梓されている
【参】Bliss, M 著 梶・三枝訳 「ウィリアム・オスラー ある臨床医の生涯」、メディカルサイエンス・インターナショナル（金大ライブラリー蔵）
- 4) カロッサ:「幼年時代」・「美しき惑いの年」・「若き日の変転」など、岩波文庫
- 5) 森鷗外全集、岩波書店
山崎一穎:「森鷗外 明治人の生き方」、ちくま書房
小堀桂一郎:「森鷗外」、ミネルヴァ書房（ヴァケーション用）
加賀乙彦:「鷗外と茂吉」、潮出版社
今野勉:「鷗外の恋人」、NHK 出版
- 6) 中勘助:「銀の匙」、岩波文庫

- 7) 宮本常一：「忘れられた日本人」、岩波文庫
 8) 小宮豊隆編：「寺田寅彦随筆集」、岩波書店
 9) 加藤周一：「私にとっての20世紀」、岩波現代文庫
 10) 蓮實重彦・山内昌之：「われわれはどんな時代を生きているか」、講談社現代新書

※ゴシックで示した著者は医師

- A) 渡辺和子：「置かれた場所で咲きなさい」、幻冬舎
 B) 下村修：「クラゲに学ぶ」、長崎文献社

山本 博 (昭和50年卒業)

Kennst du das Land 君よ知るやかの国
 —10冊の「世界との窓」—



私は海外に出るのが遅いほうでした。1998年、日米英三国間共同研究の代表者としてイギリスのパートナーを return visit したのが最初です。ですから、学生の皆さんのような年頃から比較的最近に至るまで、異国や世界への関心と想像は、未知なるがゆえに、限りなくつよまったり、果てなくかけ廻ったりしたものでした。研究者は、海外に出なかったことを言いわげやハンディキャップにするわけには参りませんから、英語での読み書きや、国際会議、海外研究者との交流、留学生受入れはかなり真剣に行ったと思います。一方、外に出ていない分、自分が住む日本という国とその文明文化が、世界の側からは一体どのように見えているのかも心にかかったことでした。これらの要素は、自己形成に、仕事や生活のし方に、そして読書に、否応なく影響してきたように思います。以下に挙げるのは、このような一医学徒にとって、世界との窓のような役割を果たしてくれたと思われる書物の例です。後輩の皆さんが本を選ぶときや、ものを考えるときの参考になれば幸いです。

1. 即興詩人／アンデルセン [著]；森鷗外 [訳]、筑摩書房、1995.12 (図開架 918.68:M854:10)

タイトルに掲げた Kennst du das Land は、ゲーテ「ウィルヘルム マイステル」で少女ミニヨンがうたう歌の出だしである。Kennst du das Land, wo die Zitronen blühen, Im dunkeln Laub die Goldorangen glühen 君よ知るやかの国を、レモン花咲き、こがねなすオレンジ暗き葉かげにのみり (関泰 訳) とつづく。歌詞をたどって行くと、das Land は、北欧の人々のあこがれの地、陽光とルネサンスの美に輝くイタリアを指すことがわかる。本書「即興詩人」は、デンマークの作家アンデルセンによるイタリア紀行小説を、ドイツ留学から帰った鷗外が、軍医職の合間を縫い「大抵夜間、もしくは大祭日日曜日にして家に在り客に接せ

ざる際に」9年余をかけて完訳したものである。読者が旅するのは、イタリアの風光と詩人の人生だけではない。「和漢の素養 [と] 欧文の教養 [が] 息づいた」(日夏耿之介) 約40万語集におよぶ雅文体世界が、燦然と行く手にひろがる。

2. 銃・病原菌・鉄：一万三〇〇〇年にわたる人類史の謎 上・下／ジャレド・ダイヤモンド著；倉骨彰訳、草思社、2000.10 (図開架 204:D537) 【原書】Guns, germs, and steel : the fates of human societies / Jared Diamond, W.W. Norton, c2005 (図開架 204:D537)

インカ帝国はなぜ滅びたのか？中国はなぜヨーロッパにリードを奪われたのか？なぜ、シマウマは家畜化されず、アフリカは遅れたのか？人類を含む生物と社会が辿ってきた運命についてのさまざまな謎が、現代を代表する知性ジャレド・ダイヤモンドによって、医学、地理学、生態学、進化生物学、考古学、社会学、言語学などの学識を基盤に、学際的に解き明かされる。本書で展開されるパースペクティブの壮大さと深遠さは、ダーウィン「種の起原」に比肩されよう。

3. 文明崩壊：滅亡と存続の命運を分けるもの 上・下／ジャレド・ダイヤモンド著；楡井浩一訳、草思社、2005.12 (図開架 204:D537) 【原書】Collapse : how societies choose to fail or succeed / Jared Diamond, Penguin, 2006

選んだ10冊中2冊までを結果的にダイヤモンド作が占めるところとなったが、本書は一推しの地球環境論。17世紀ポリネシアにおけるイースター島社会の崩壊、徳川時代の日本における森林保護の成功など、過去の実例を緻密に検証しつつ、現代から将来に亘る地球人に、危機意識溢れる警鐘を打ち鳴らし、また、炯眼に富む持続可能社会づくりへの提言を行っている。2008(平成20)年度金沢大学医薬保健学域医学類後期日程入試の小論文問題Iは、本書から出題された。

4. Molecular biology of the islets of Langerhans / edited by Hiroshi Okamoto, Cambridge University Press, 1990 (図開架 493.12:M718)

Islets of Langerhans ランゲルハンス島とは、膵臓に点在してインスリンなどのホルモンをつくる組織で、障害されると糖尿病が発症する。本書は、これらのホルモン遺伝子の構造・はたらきと、関係する病態を、分子生物学の視点から集大成した英文単行本である。Editor は、恩師岡本宏 東北大学監事・名誉教授(昭和39年金沢大学医学部卒業、日本学士院賞受賞者)。私も一つの章の執筆と全体校正を担当した。日本人による Cambridge University Press からの単行本出版は、国立遺伝学研究所木村資生博士(1983年)について史上二番目。2008年には本書のペーパーバック版も出版された。

5. 山川健次郎伝：白虎隊士から帝大総長へ／星亮一著、平凡社、2003.10 (図開架 913.6:H825)

戊辰戦争に敗れ、本州北東の斗南藩へと移った旧会津藩は、将来への希望を一人の少年に託した。山川健次郎 白虎隊幼少組隊士がそうである。「死んで来いッ」と15才で書生に送り出され、18才で渡米した健次郎は、イエール大学で物理学を修め、帰朝後日本人として初の東京帝国大学物理学教授・理学博士、やがて東京帝大総長となる。田中館愛橘や長岡半太郎を育て日本の物理学会を領導するとともに、九州帝大初代総長、京都帝大総長、明治専門学校総裁、武蔵高校長を兼任、わが国の高等教育の礎を築いた。本書は、命をかけて勉強するとはどういうことか、教育は後世に何を残しうるかを教える。

6. 遥かなるケンブリッジ：一数学者のイギリス／藤原正彦著、新潮社、1991.10 (図開架 302.33:F961)

後年「国家の品格」を著すことになる数学者藤原正彦氏の作品。前著「若き数学者のアメリカ」では、執筆活動を開始して間もなかったせい、あるいはアメリカという自己主張のつよい国に留学したせい、ややごちなく生意気な部分もあったが、本書は肩の力がぬけ、ジェントルマンシップやユーモアの精神など、ケンブリッジの知的風土を淡々と余すところなく伝える。

7. 劇場街の科学者たち／松原一郎著、朝日新聞社、1992.4 (図開架 049:M434)

「遥かなるケンブリッジ」に優るとも劣らない、イギリス留学記の白眉。シェークスピア劇やオペラが上演される劇場街に位置するロンドン大学キングスカ

レッジでの日々を中心に、ほほえましい失敗談や有名教授の天才ぶりなど、外国人研究者との交流が素直に香り高く描かれる。いくつかの哀しい別れもある。巻末に至り読者は、著者自身も彼岸に召されたことを知る。松原一郎博士は金沢市出身の生理学者で、私が東北大にいた頃、先輩助教授として親切にしてくださいました。日本の肝移植レシピエント第1号として登録されていたが、待機中、豪州ブリスベンで幽明境を異にされた。50才の若さであった。医学生物学分野のもっとも権威ある学会である Gordon Research Conference に Matsubara Memorial Lecture が開設されたことは、その早世が如何に惜しまれたかを物語る。松原一郎先生は、「諦養興学一道清居士」の法名が刻された墓の下、金沢市野田山に眠る。

8. 名譽と順応：サムライ精神の歴史社会学／池上英子著；森本醇訳、NTT出版、2000.3 (図書庫 210.4:I26)

【原書】The taming of the samurai: honorific individualism and the making of modern Japan /Eiko Ikegami, Harvard University Press, c1995 (図開架 210.4:I26)

著者池上英子教授は米国ニュースクール大学で活躍中の社会理論学者。比較社会学のグローバルなフレームの中で、人間と社会の関わり方のプリンシプルを探る。本書は叢書「世界認識の最前線」の嚆矢として選ばれ、森本醇氏によって和訳された。日本人によって英語で書かれた日本論という点で、新渡戸稲造(著)、矢内原忠雄(訳)の「武士道」(Bushido: The Soul of Japan)を彷彿させる。サムライの心性・エトスに「過去数世紀にわたる日本の歴史のなかでつづいてきた個人性と集団主義の間の対立と緊張を正しく認識する鍵」を発見した池上氏は、名誉文化を基礎に形成された「名誉型」の個人主義と集団主義が日本人のアイデンティティーと日本社会の活力を支えてきた、と説く。ベネディクト「菊と刀」を超克し、読むものを元気にしてくれる日本歴史・文化・社会論。

9. 日本植物誌：シーボルト『フローラ・ヤポニカ』／【シーボルト著】；木村陽二郎、大場秀章解説、八坂書房、2000-2007.10 (図開架 472.1:S571)

シーボルト(1796年ドイツWürzburg生まれ、1866年Münchenで死去)は、日本で最初に西洋医学を教えた外国人医師である。シーボルトは稀代の博物学者でもあった。5年間の日本滞在中、植物から魚類、甲殻類、爬虫類・両生類、鳥類、哺乳動物に至る広汎な生物の標本を採集し、帰欧後 Flora Japonica「日本植物誌」と Fauna Japonica「日本動物誌」を著した。所収の図

譜の多くは日本人絵師川原慶賀によって描かれた。慶賀は当初シーボルトの要求にとまどったものの、やがて期待どおりかそれ以上の筆づかいを見せるようになったとされる。この過程は、ねじめ正一氏の小説ではつぎのように表現されている；「芍薬とは、このような花であったのか—慶賀は目の覚める思いだった。俺は今まで何を見ていたのだろうと思った。シーボルトに渡したあの絵が恥ずかしかった。シーボルトはあの絵に描かれた芍薬をニセモノだと言った。それは真実であった。正確でないから、本物そっくりに描いていないからニセモノなのではない。芍薬を芍薬たらしめている何か、芍薬の本態が、あの絵にはまったく欠けていた」（「シーボルトの眼 出島絵師 川原慶賀」）。誠に慶賀の図譜は、彩色の有無を問わず、迫真の傑作ぞろいである。魚はいまにも泳ぎ出しそうであるし、動物からは拍動や呼吸、体温が伝わってくるかのようだ。Fauna Japonicaの圧巻は爬虫類・両生類編のオオサンショウウオだろう。本物に出会った以上のインパクトを与える。本書は、Flora Japonicaのパートの復刻版である。シーボルトと慶賀の共同作業による、科学の美を味わってほしい。

10. 落日の地平へ／曠野信太郎著、文藝書房、2004.11
(図書館 913.6:A662)

昭和18年金沢医科大学臨時医学専門部卒業の竹田 鎧先生（ペンネーム 曠野信太郎、2007年3月31日逝去）は、軍医として出征、終戦後シベリアとモンゴルに抑留された。本書は、帰国後60年近い歳月を経て、自身を主人公（「竹村青二郎」とする小説の形で書かれた回想記である。さし絵11点も自筆。「中尉どのは若しや金沢市のご出身では？」訊ねてみると老中尉は果して北陸の古都金沢出身であると分り、さらに青二郎と同じ大学の先輩で、しかも高い学問的業績を持つ人であることも分かった」という場面もある。想像を絶する極限の日々がつづくが、青二郎は生けるものにも死せるものにも医師そして人間として命がけの誠を尽くす。青二郎の同僚「加須賀幸男軍医・通訳」のモデルとなった春日行雄医師・日本モンゴル協会「テムジンの友塾」塾長によれば、竹田 鎧先生は患者・抑留者・遺族から「アムラルト病院の生き佛さま」とよばれ、ウランバートル市の病院跡に建設予定の日本展示室には「竹田日本館」の名が冠されるという。（金沢大学附属図書館HP「金大生のための読書案内—教員から学生へ」（<http://www.lib.kanazawa-u.ac.jp/portal/osusume/osusumeindex.html>）（2008年9月～現在に至る）より）

谷内江昭宏（昭和54年卒業）



はじめに

ここ数年、歴史を学ぶことの楽しさを、あるブログを通じて教えられています。歴史と言っても、現代史、近代史、中世史、古代史など時代区分は様々にあります。また、郷土史、日本史、アジア史、世界史など、地域区分によっても興味のありようが異なってきます。ここでは、私自身が感動した、ひと味違う歴史の本を二冊紹介させていただきます。たかだか1,000年の歴史ではなく、1万年あるいは10万年の歴史です。

『The Walking People』

イロコイ連邦のことを知るようになったきっかけは、Paula Underwoodという女性が書いた『The Walking People』という書物に出会ったことです。今から10年以上前に、『一万年の旅路—ネイティブ・アメリカンの口承史—』（翔泳社）という題で星川淳氏の翻訳で出版されています。ネイティブ・アメリカンの一部族であるイロコイ族の系譜をひく若い女性が、口承の担い手

となるべく訓練を受けました。後に、文字を持たない祖先の歴史を「書物」とするべく綴ることになったものがこの本です。北東アジアの海岸を出発した後、アラスカやロッキー山麓に一時的な定住を繰り返しながら、果てしなく長い距離を悠久の時間をかけて歩き続け、オンタリオ湖畔に定住するようになった一族の歴史。この本によると、イロコイ族の祖先は、おおよそ1万年前、今の北東アジアの海岸に定住していました。大地震と大津波に襲われたことをきっかけにその定住地を離れ、温暖化により海に飲み込まれつつあったベーリング陸橋を苦難の末に渡り切る顛末は、手に汗を握る冒険談です。歩く旅を続け、数え切れない苦難に会いながら様々な決断を迫られ、その都度に一族が学んで行く知恵の蓄積と口承による伝達。それが、イロコイの連邦制度、合議制などに結実し、アメリカ合衆国憲法の理念へと受け継がれていきました。旅の記憶の伝承と経験の蓄積が、豊かな知恵を生み出したので

す。

この本には、歩く旅の過程で一族が学んだ4つの知恵が記載されています(以下、いずれも星川訳)。

一つ目の知恵:われらの中にじゅうぶん知恵のある者がいないときは、多くの者が心一つにすれば、確かな道を見いだせるかもしれない。

二つ目の知恵:つねに人に従う者が学ぶのは、他人の背中の中だけである。

三つ目の知恵:選び方はたくさんあるが、多くの場合すばやく選ぶ事が最善で、さもないと選んでも手遅れになりかねない。

四つ目の知恵:一族の中で解決できることも多いけれど、ときには年長者の意見が最善である。

モンゴロイド1万年の旅と知恵の記録です。

『The Great Human Diasporas』

Luigi Luca Cavalli-Sforza が著した人類史です。1995年に英語訳が出版された時に購入したのですが、お気に入りです。時々読み返しています。Cavalli-Sforza は人類遺伝学者ですが、豊富な遺伝学の知識と技術、データを駆使して多角的な視点で人類史を解き明かそうとしています。Homo sapiens sapiens がおよそ10万年前、リフトバレーを離れ、出アフリカの旅に出てから世界中に拡散する道筋を、遺伝学、言語学、考古学の成果をもとにわかりやすく解説しています。

とりわけ印象的だったのは、スペイン北部のバスク地方の人々の間でRh- 遺伝子が濃縮されていること、他の様々な遺伝子の多様性のデータからも、バスク地方の人々が旧石器時代(クロマニヨン人)の遺伝子の痕跡を濃厚に残していることです。それは言語学的分析によっても明らかにされています。例えば数字の3を表す言葉は、英語では“three”、アイルランド語では“tri”、デンマーク語では“tre”、ドイツ語では“drei”、

イタリア語では“tre”、そしてスペイン語では“tres”と、いずれも似通っています。ところが、バスク語では“iru”という、全く異なった語源を持つとしか思えない言葉が使われるのです。血脈も文化も異なる、バスク民族の誇りをくすぐるようなデータです。

しかしこの本で著者が指摘しているのは、個々の民族の差を強調し、そこに優劣の証拠を見いだそうということではありません。むしろ、出アフリカとその後の離散(diaspora)の歴史により、Homo sapiens sapiens に驚くほどの多様性が育まれたという事実です。そしてそれは、いがみ合うべき多様性ではなく、人類が誇り、享受すべき多様性です。Cavalli-Sforza はあえて“race and racism”と題する章を設けて、次のように書いています。「Racism はすぐに、また簡単には治すことのできない慢性疾患である。そして、racism に打ち勝つための最終兵器は、あらゆるレベルでの教育である。」

著者は本の最後で、(しばしば人種差別の根拠とされる)IQのような数値化できる指標に意味を見いだすのではなく、倫理性、寛容性、辛抱強さ、知恵など、数値化できないものにこそ価値を見いだすべきであると述べています。

おわりに

国の経済や政治が不安になると、ことさらに「民族の歴史」が強調されることが多くなります。排他的で、非寛容な態度が虚勢と見せかけの団結を生み出し、虚像のリーダーを作り出します。こういう時代には、私たち人類の歴史をもう少し大きな時間軸で眺め直すのが良いかも知れません。

(Medical Tribune 2003年1月31日号31ページ リレーエッセイ「歴史の本」(金沢大学大学院医薬保健総合研究科医学系小児科教授 谷内江昭宏)より一部抜粋)

金子周一 (昭和57年卒業)



藤沢周平『藤沢周平全集』*

娯楽の本とされるものであり、おまけに一冊でなくて申しわけない。しかし、藤沢周平のどの本でも良いので何冊かを読んで貰いたい。何冊か読んでみると、あるパターンに気がつく。そこに味わってもらいたい世界がある。江戸の人々が実際に書いてあるような考え方や、暮らしであったかは知らない。しかし、諸君の暮らししている平成と異なった世界がある。年間に3万

人も人が自殺し、ネットもテレビも新聞も誰かを悪者にして楽しむような世界と異なっている。藤沢周平が描く世界を感じると、日本人が誇らしくなってくる。

*図書館注:全集は1巻のみ所蔵、他は文庫本で所蔵。(金沢大学附属図書館報“こだま”第168号(2009年4月発行)全学類長による「わたしの薦める一冊~新入学の諸君へ~」より)